

第2章

家族とのかかわり

～妻、祖父母との関係を中心として～

福丸 由佳



第1節

出産への立ち会い

◆子どもの出産に立ち会った経験を持つ父親は、05年調査よりも増加傾向にある◆

妊娠中の両親学級や父親学級の普及などにみられるように、妊娠・出産というライフイベントに夫婦で参加する機会はますます増えている。図2-1-1は、父親の出産への立ち会いの状況を05年と09年とで経年比較した結果である。これによると、立ち会い出産を希望して実際に経験した父親の比率は、05年の46.6%から09年は55.2%と増加しており、「しなくなかったけれどした」父親を含めると、この4年間で8.5ポイント上昇したことがわかる。

また、立ち会い出産に肯定的な意識を持つ父親（立ち会い出産を「した」父親と「したかったけれどできなかった」父親）は、05年の時点が74.8%、4年後の09年の結果では78.9%と、こちらも上昇傾向にあることが示されている。一方、「しようと思わなかったし、しなかった」父親は05年の24.2%から今回は20.2%に減少し、5人に1人の割合となっている。

◆若い世代ほど、肯定的に出産に立ち会う比率が高くなっている◆

次に、子どもの年齢別に立ち会い出産の状況を比較した結果が、図2-1-2である。これを見ると、どの年齢においても、父親の立ち会い出産の比率は05年の結果より増加していることが示されている。この中で、05年以降に生まれた子どもの立ち会い出産の比率、すなわち09年のデータの中の0歳児、1歳児、2歳児の子どもを持つ父親は、それぞれ、59.1%、57.6%、59.0%が立ち会い出産を経験している。このことから立ち会い出産をする父親の比率はわずかではあるが増加傾向にあることがみえてくる。

また、今回の結果を父親の年代別に比較した結果が図2-1-3である。どの年代においても、立ち会い出産を経験した比率は、50%を超えていることがわかる（「した」+「しなくなかったけれどした」比率は、20代が59.3%、30代は57.3%、40代は51.7%）。20代の父親は6割弱が、立ち会い出産に対して肯定的でかつ、実際に立ち会っていることから、とくに若い世代の父親は出産への立ち会いに肯定的である傾向が示されている。

図2-1-1 立ち会い出産（経年比較）

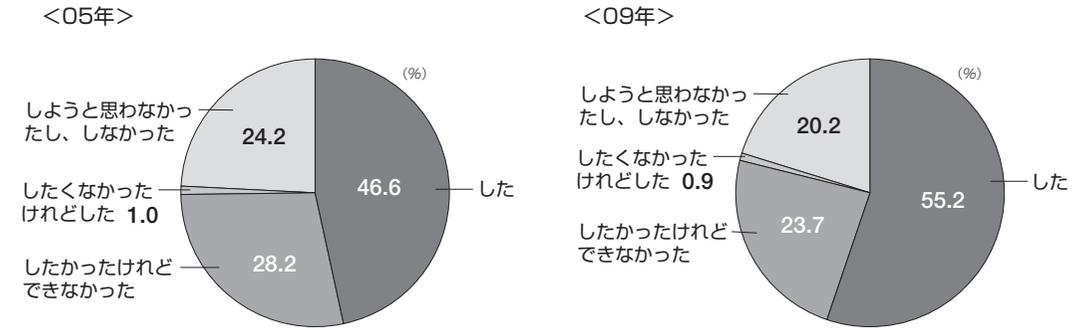
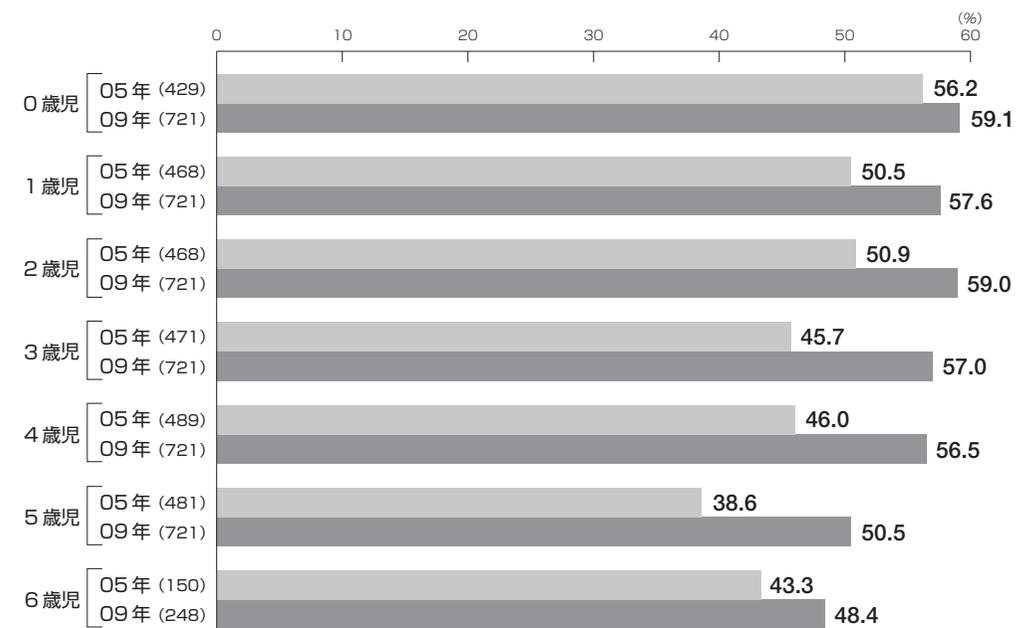
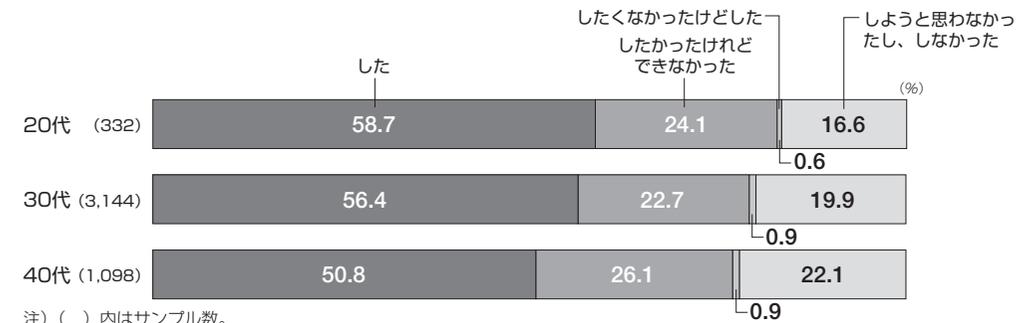


図2-1-2 立ち会い出産をしたか（子どもの年齢別 経年比較）



注1) 「した」+「しなくなかったけれどした」の%。
 注2) 今回の対象の子どもに限定していない。
 注3) ()内はサンプル数。

図2-1-3 立ち会い出産をしたか（父親の年代別）



注) ()内はサンプル数。

◆現在の育児参加度が高い父親は、低い父親より立ち会い出産をした比率が7.7ポイント高い◆

立ち会い出産を肯定的にとらえ、また実際に立ち会う父親の特徴にはどのようなものがあるだろうか。ここでは、現在の育児参加という視点から検討した。図2-1-4は、現在の育児参加の程度を低群、中群、高群の3群に分け、各群における立ち会い出産の比率を比較したものである。これをみると、「したかったけれどできなかった」父親の比率には3群間に違いがみられないことがわかる。一方、立ち会い出産を「した」父親については、現在の育児参加度高群が58.9%で、低群と比べると7.7ポイント高くなっている。一方、「しようと思わなかったし、しなかった」父親は、現在の育児参加度低群が24.7%で、育児参加度高群より8.0ポイント高くなっている。

◆立ち会い出産には、職場の両立支援制度の整備状況や父親の職場に対する意識なども関係しているようだ◆

次に、立ち会い出産の状況と職場環境について検討してみる。父親の育児参加には労働時間をはじめとする仕事の要因が関連することがすでに指摘されているが、立ち会い出産についてはどうだろうか。図2-1-5は、立ち会い出産に肯定的な意識を持ちながら、「したかったけれどできなかった」父親と、立ち会い出産を「した」父親について、職場の両立支援制度の有無を比較した結果である。

それによると、どちらの群においても、フレックスタイム制度や短時間勤務制度といった柔軟な働き方ができる職場は半分以下であるが（短時間勤務制度では「したかったけれどできなかった」が28.1%、「した」が33.1%など）、実際に立ち会い出産できた父親のほうが、わずかながら職場の制度は整っている傾向にあることがうかがえる。

また、「職場の同僚に迷惑がかかるから、家庭の事情を理由に休むことはしない」という意識に肯定的な父親の比率（「とてもそう思う」＋「まあそう思う」）は、立ち会い出産を「した」群では41.8%なのに対し、「したかったけれどできなかった」群では47.1%と、5.3ポイント高くなっている（図2-1-6）。

立ち会い出産は、父親自身の意識や価値観もかかわってくると同時に、職場の制度など、さまざまな要因が関係している様子がうかがえる。

図2-1-4 立ち会い出産をしたか（育児参加度別）

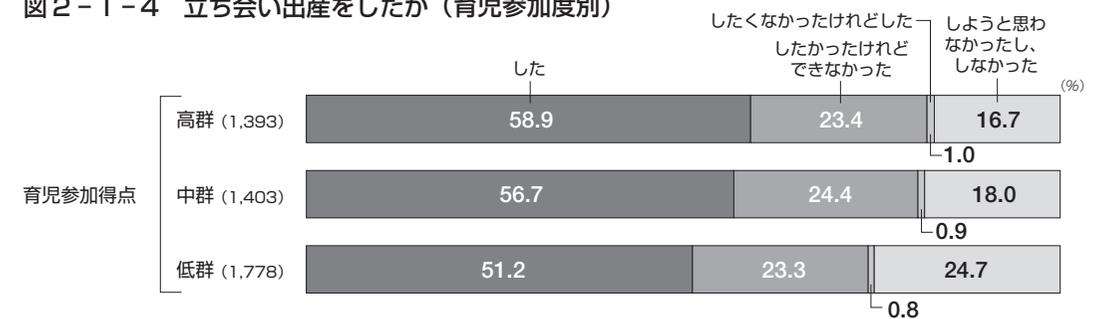


図2-1-5 立ち会い出産をしたか（職場の両立支援制度の有無別）

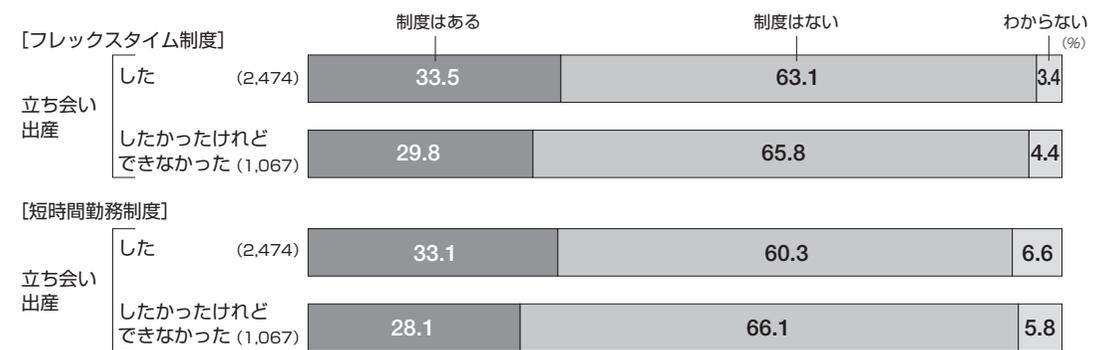
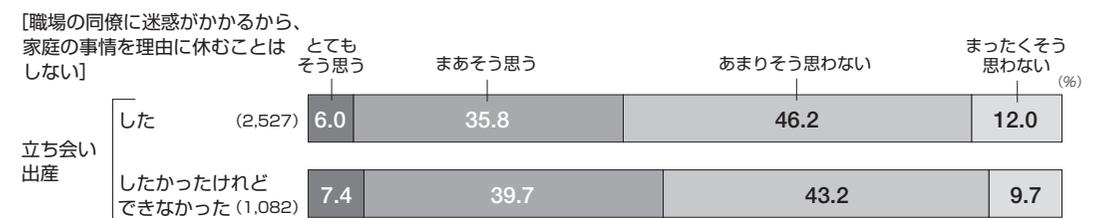


図2-1-6 立ち会い出産をしたか（職場への意識別）



第2節

妻との関係

◆ 8割以上の父親が、妻と、子どものことについて毎日話をしている。一方、自分の仕事や生活上の悩みを妻に相談する父親は5割以下である ◆

子育て中の父親は、妻との関係についてどのような意識を持っているのだろうか。ここでは、コミュニケーションや支え合う関係などを中心に、妻との関係を検討してみたい。

まず、「妻との会話」や「妻の相談にのる」「妻に相談する」、といったコミュニケーションについてみる。「子どものことについて妻と毎日話している」「子ども以外のことについて妻と毎日話している」「自分の仕事・生活上の悩みを妻に相談している」「妻の（仕事）・生活上の悩みの相談にのっている」の4項目の中で、比率がもっとも高かったのは「子どものことについて妻と毎日話している」で、全体の86.8%だった（「とてもあてはまる」＋「まああてはまる」、以下同）。また、子どもの話題に比べると少ないが、子ども以外のことでも妻と毎日話をしている父親は76.5%にのぼることが示されている（図2-2-1）。

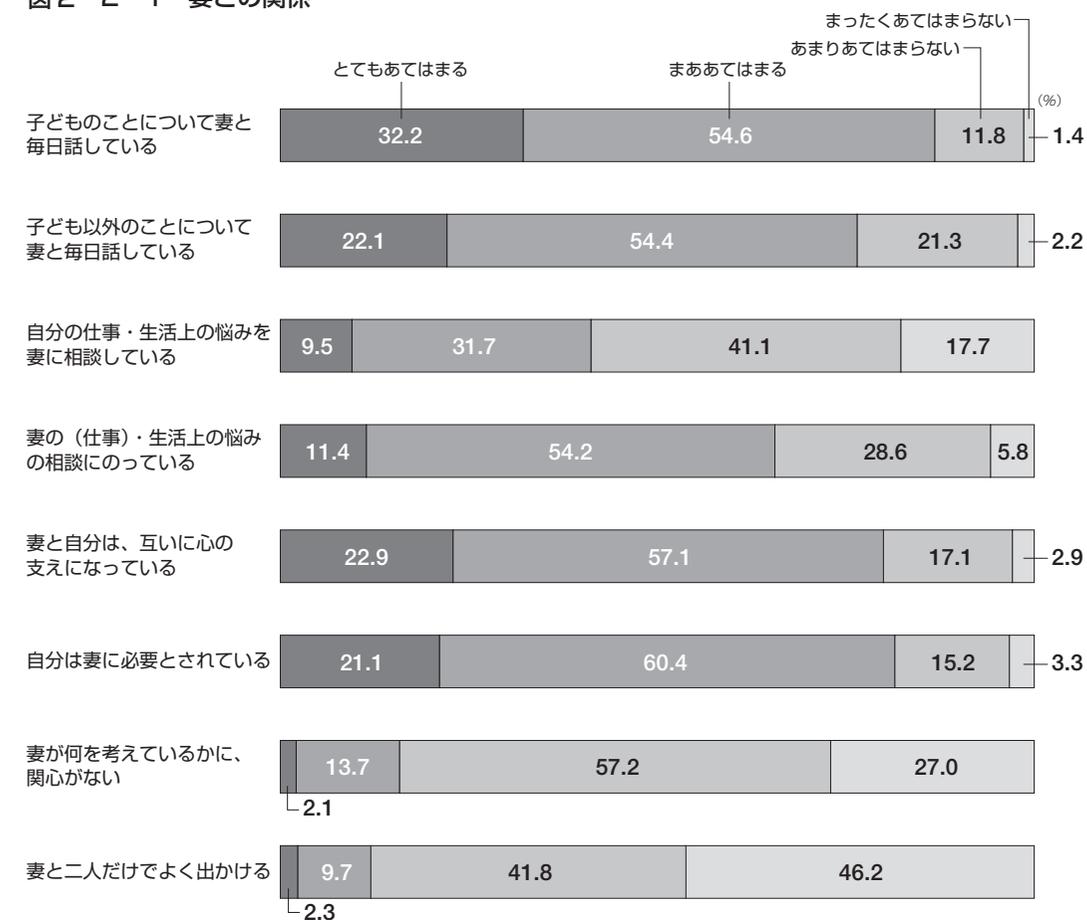
一方、「妻の（仕事）・生活上の悩みの相談にのっている」父親は65.6%、そのうち「とてもあてはまる」は11.4%だった。また、「自分の仕事・生活上の悩みを妻に相談している」については、「とてもあてはまる」が9.5%で、「まああてはまる」を合わせても41.2%と、全体の半分以下となっている。逆に、「まったくあてはまらない」と答えている父親も17.7%いることから、父親の中には、自分の悩みは妻に相談しないという人も少なからずいるようである。

◆ 夫婦二人だけで出かけるのは、ごくわずかである ◆

「妻と自分は、互いに心の支えになっている」「自分は妻に必要とされている」では、どちらも80%以上の父親が肯定している傾向が示されている（「とてもあてはまる」＋「まああてはまる」）。

また、「妻が何を考えているかに、関心がない」に否定的な父親は84.2%で（「あまりあてはまらない」＋「まったくあてはまらない」）、妻に対してある程度の関心を持っている様子が示された。ただ、行動レベルでは、「妻と二人だけでよく出かける」と答えた父親は12.0%にとどまってお（「とてもあてはまる」＋「まああてはまる」）、「まったくあてはまらない」が46.2%にのぼっている。子どもに手がかかるこの時期は、夫婦だけで出かけるのは現実的には難しいようである。

図2-2-1 妻との関係



◆子どもの年齢が低いほど、子どもの話題をはじめ、夫婦の会話の頻度は高い◆

図2-2-2 (p.51~52)は、前頁で概観した妻との関係について、結果の一部を対象の子どもの年齢別にあらわしたものである。これを見ると、子どもの年齢によって違いがみられることがわかる。

まず、「子どものことについて妻と毎日話している」は、0歳児を持つ父親の47.3%が「とてもあてはまる」と答えており、「まああてはまる」を加えると93.1%と、もっとも高い比率になっている。全体に子どもの年齢とともに、その比率は減少し、6歳児の子どもを持つ父親の20%以上は、「子どものことについて妻と毎日話している」ことはない（「あまりあてはまらない」+「まったくあてはまらない」）と答えている。

「子ども以外のことについて妻と毎日話している」でも同様で、0歳児を持つ父親の84.1%（「とてもあてはまる」+「まああてはまる」、以下同）に対して、3歳児では76.0%、5歳児の父親は70.5%となっている。子どもの年齢が低いほど、夫婦の会話が多いことがうかがえる。

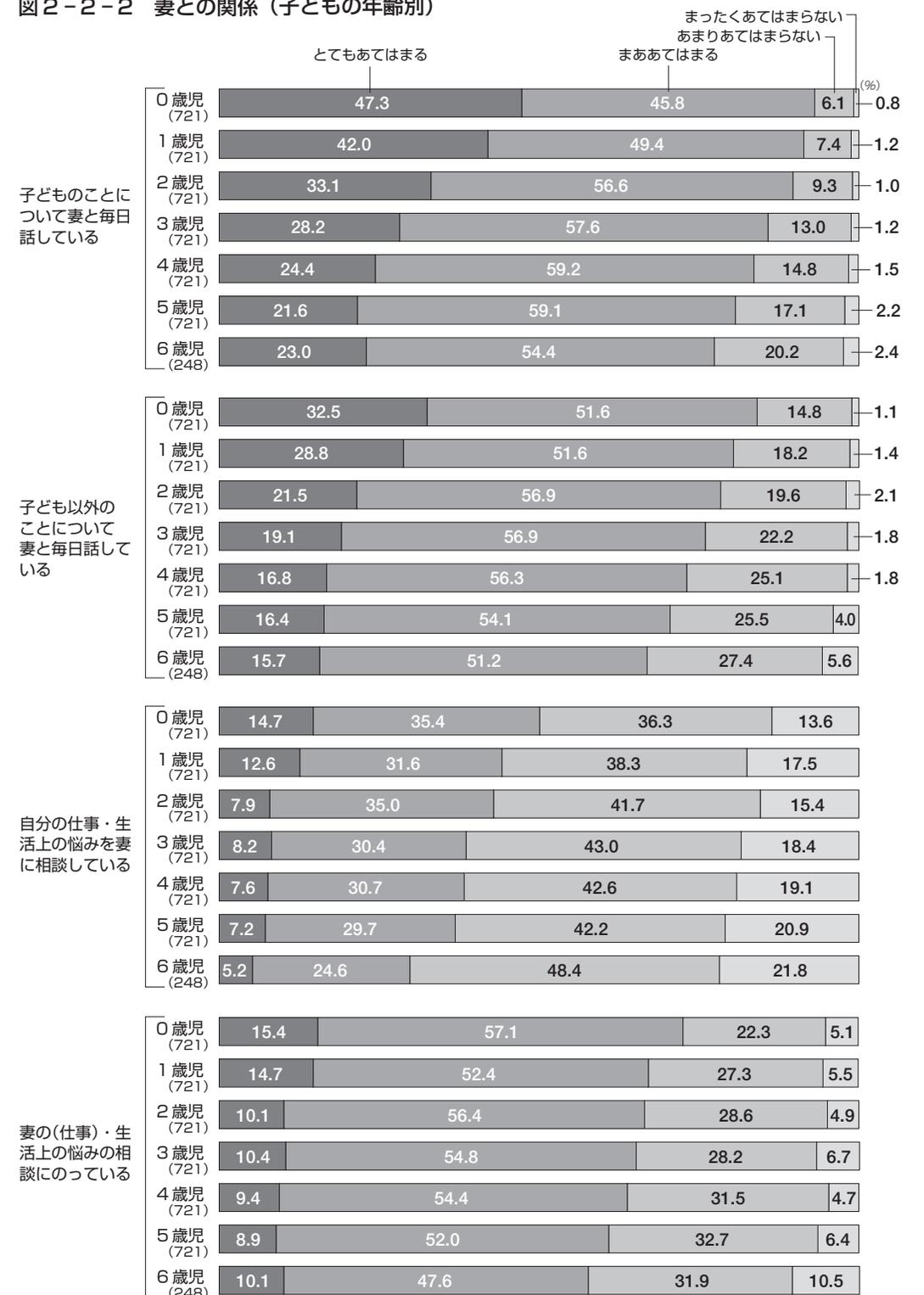
さらに、「自分の仕事・生活上の悩みを妻に相談している」「妻の（仕事）・生活上の悩みの相談にのっている」においても、この傾向は同様である。とくに、父親が自分の悩みを妻に相談する比率は0歳児では50%を超えているのに対して、その比率は年齢とともに下がり、6歳児を持つ父親では、あまり、もしくはまったく相談しない父親が70%を超えていることがわかる。

◆子どもの年齢が低いほど、「妻に必要とされている」「互いに心の支えになっている」という意識は強い。一方、夫婦二人だけで出かけることは、年齢による変化はあまりみられない◆

図2-2-2 (p.52)に示されるように、「妻と二人だけでよく出かける」は、年齢による変化はあまりない。出かける比率がもっとも高い0歳児の父親でも20.2%にとどまっている（「とてもあてはまる」+「まああてはまる」）。子どもに手のかかる時期であり、80%近くが、妻と二人で出かけることは「あまり」もしくは「まったくあてはまらない」と答えている。しかし、子どもの成長や就園などにともなって子育てにかかる負担が減少してきたからといって、夫婦二人で出かけることが増えていくわけではないようだ。2歳児以降、いずれの年齢においても、80%以上の父親が「妻と二人だけでよく出かける」ことは「あまり」もしくは「まったくあてはまらない」と答えている。

では、「自分は妻に必要とされている」「妻と自分は、互いに心の支えになっている」についてはどうか。図2-2-2 (p.52)からわかるように、子どもの年齢があがるにつれて、「自分は妻に必要とされている」「妻と自分は、互いに心の支えになっている」といった意識を持つ父親の比率が低下していく様子が見られる（「自分は妻に必要とされている」は「とてもあてはまる」が0歳児30.7%⇒6歳児18.1%、「妻と自分は、互いに心の支えになっている」は0歳児30.4%⇒6歳児19.0%）。一方、「妻が何を考えているかに、関心がない」は、子どもの年齢によって減少しているとはいえなかった。父親の意識の中では、妻への関心が低くなるわけではないが、子どもの成長につれて、父親自身が「自分は妻に必要とされている」「妻と自分は、互いに心の支えになっている」という実感があまり持たなくなっている様子が見られる。

図2-2-2 妻との関係（子どもの年齢別）

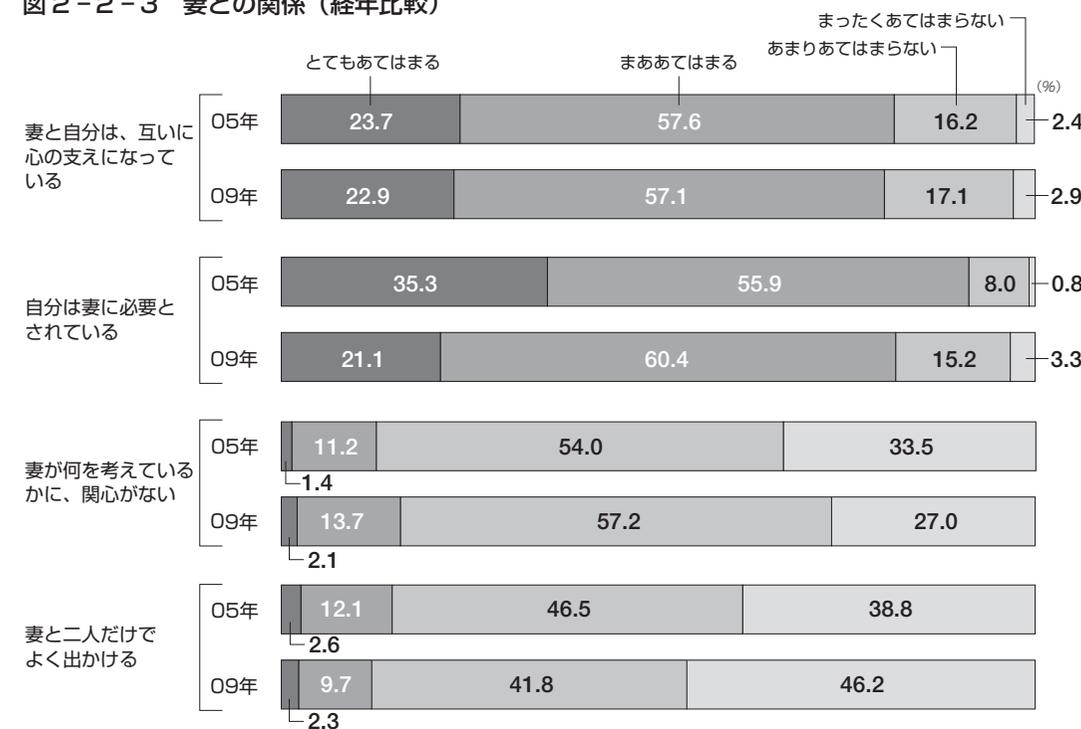


※次ページへつづく。

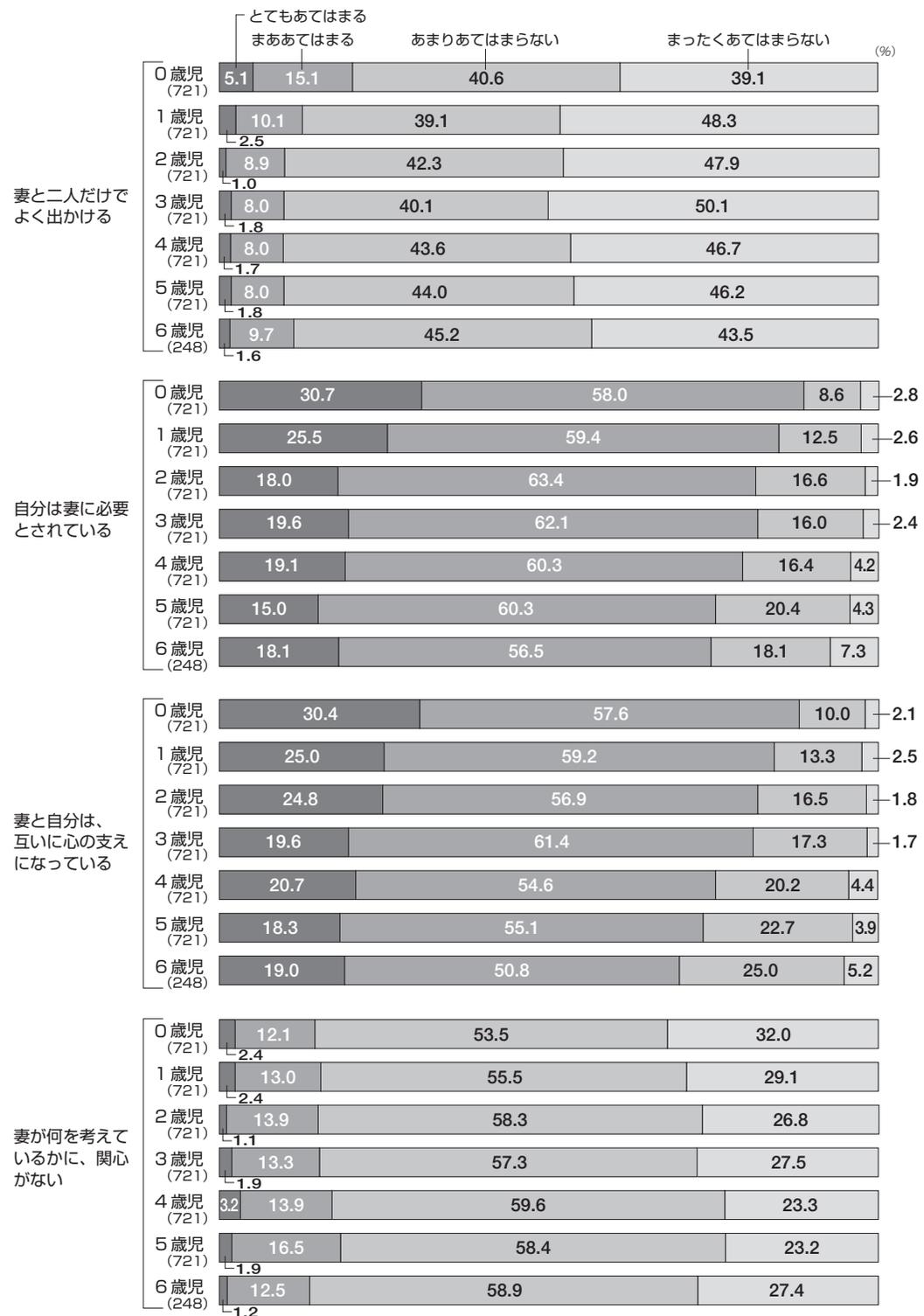
◆父親が「自分は妻に必要とされている」と感じている比率は、05年調査に比べて減少している◆

妻との関係について、経年比較からはどのようなことがみえてくるだろうか。図2-2-3は経年比較が可能な項目について05年と比較した結果を示したものである。これをみると、「自分は妻に必要とされている」を除いて、「妻と自分は、互いに心の支えになっている」や「妻が何を考えているかに、関心がない」、「妻と二人だけでよく出かける」については05年とあまり大きく変わっていないことがわかる。それに対して、「自分は妻に必要とされている」は、「とてもあてはまる」が14.2ポイント減少し、「とてもあてはまる」と「まああてはまる」の合計も、05年の91.2%から09年は81.5%に低下している。つまり、妻に必要とされていると感じている父親は、比率自体は少なくないものの、この4年間で比較すると、比率は減少している様子が示されている。

図2-2-3 妻との関係（経年比較）



注) 10項目中、4項目を表示。



注1) 10項目中、8項目を表示。
注2) ()内はサンプル数。

◆「自分は妻に必要とされている」という意識と、経済的なゆとり感が関連◆

前頁までの結果から、子どもの成長とともに、妻に必要とされていると感じる父親の比率が低下していることが示された。成長ともなると、子どもに手がかからなくなることも、こうした意識の変化に関連を持っていると考えられるが、経年比較の変化に対しては、どのような要因が関連しているのだろうか。

この4年間の父親の意識や、父親を取り巻く環境という視点からその変化をみると、たとえば、「父親として今後不安なこと（複数回答）」について、09年調査では選択肢を増やしたので単純に比較することは難しいが、「将来の子どもの教育費用が高いこと」（05年63.6%⇒09年70.2%）、「育児費用の負担が大きいこと」（05年54.7%⇒09年61.4%）などにみられるように、子育てに関連して経済的な不安が高くなっていることが示されている（p.39 図1-3-14）。さらに、これは09年調査のみの項目だが、48.5%の父親は、「自分の収入が減少しないかどうか」不安を感じている。こうした経済状況が、妻との関係に何らかの関連を持っているのだろうか。その点を検討するため、父親の感じる経済的なゆとりという視点と、「自分は妻に必要とされている」という意識の関係について検討してみる。

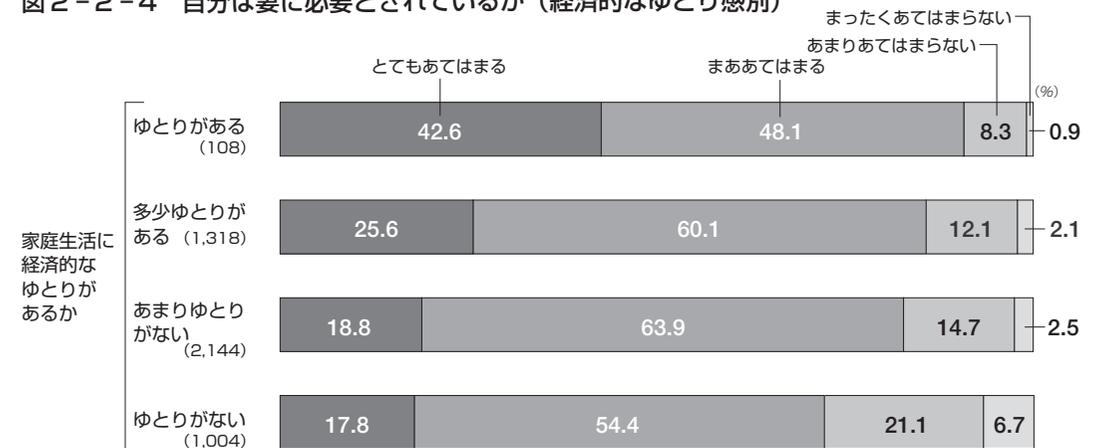
図2-2-4は、経済的に「ゆとりがある」「多少ゆとりがある」「あまりゆとりがない」「ゆとりがない」の4群で、「自分は妻に必要とされている」に対する意識を比較したものである。これを見ると、経済的に「ゆとりがある」と答えた父親の42.6%が、「自分は妻に必要とされている」と強く感じているのに対して、経済的に「ゆとりがない」と答えた群では17.8%となっている。逆に「まったくあてはまらない」と感じている父親は6.7%で、「あまりあてはまらない」を加えると、経済的に「ゆとりがない」と感じている父親の27.8%、すなわち4人に1人以上が、「自分は妻に必要とされている」とは思っていないという結果が示されている。経済的なゆとりと、「自分は妻に必要とされている」という妻との関係性に対する意識の間に何らかの関連があるようだ。

◆「一家の方針を決定する中心は自分」「自分は我が家で人気者」とらえている父親が5割を超えている◆

次に自分と家族との関係についてみると（図2-2-5）、「一家の方針を決定する中心は、自分であると思う」に肯定的な父親は71.6%（「とてもそう思う」＋「まあそう思う」、以下同）、「自分は我が家で人気者だと思う」に肯定的な父親も5割を超えている。

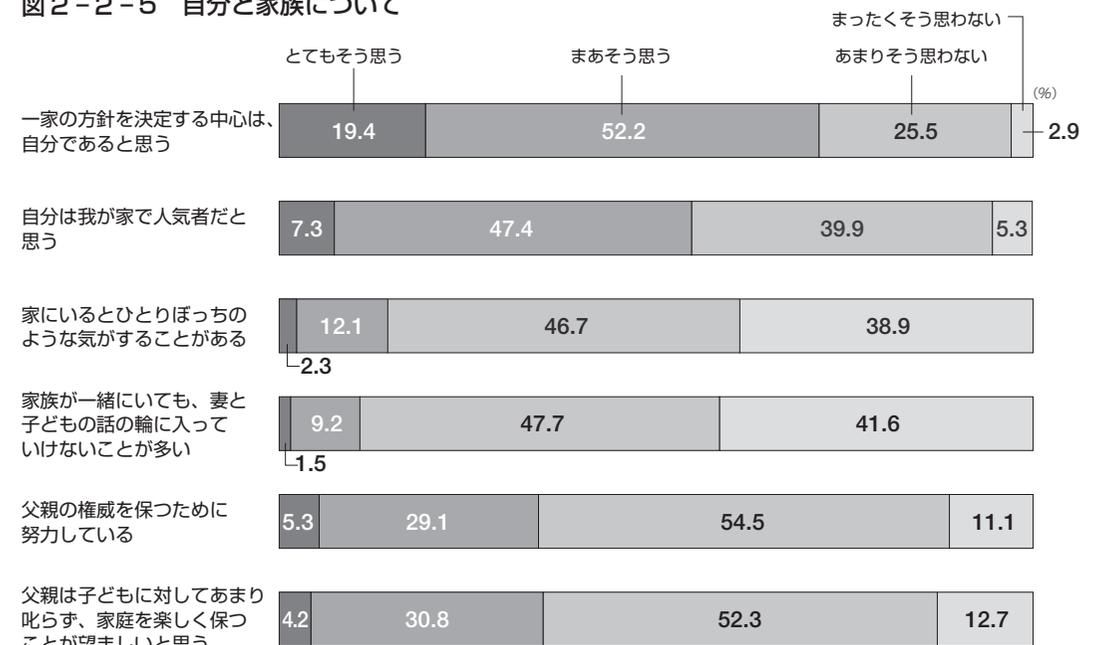
その一方で、「家にいるとひとりぼっちのような気がすることがある」「家族が一緒にいても、妻と子どもの話の輪に入っていけないことが多い」と感じている父親もそれぞれ14.4%、10.7%いることが示された。また、「父親の権威を保つために努力している」と答えた父親は34.4%、「父親は子どもに対してあまり叱らず、家庭を楽しく保つことが望ましいと思う」と答えた父親は35.0%であった。

図2-2-4 自分は妻に必要とされているか（経済的なゆとり感別）



注) () 内はサンプル数。

図2-2-5 自分と家族について



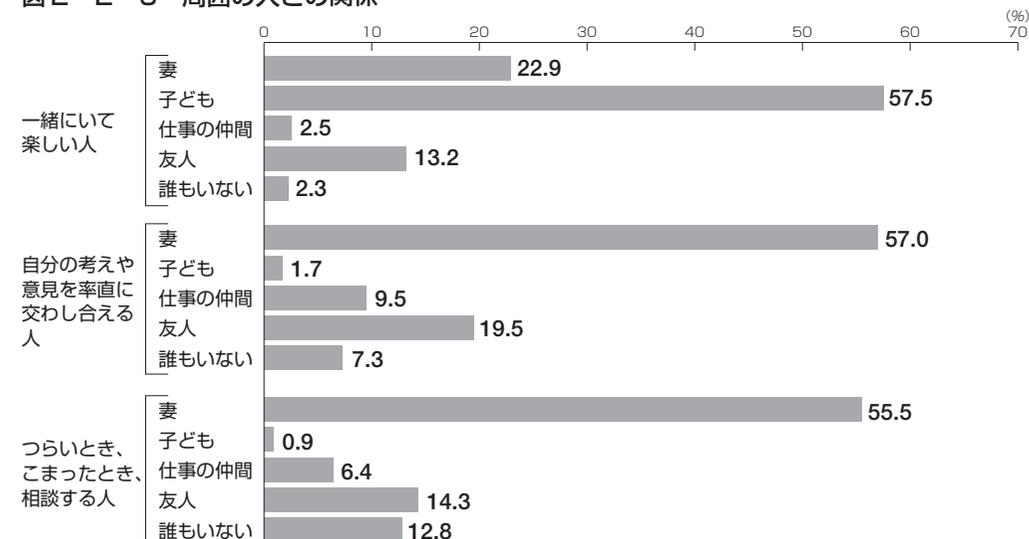
注) 7項目中、6項目を表示。

◆周囲の人との関係では、子どもや妻は一緒にいて楽しい存在である一方、率直に意見を交換したり相談したりする相手が「誰もいない」父親は、年代があがるにつれて増える傾向にある◆

家族や周囲の人との関係についての父親の意識はどうだろうか。図2-2-6は「一緒にいて楽しい人」「自分の考えや意見を率直に交わし合える人」「つらいとき、こまったとき、相談する人」について、「妻」「子ども」など8項目の選択肢からそれぞれ1つ選んでもらった結果である。選択肢の中から「妻」「子ども」「仕事の仲間」「友人」「誰もいない」の5項目の結果を比較してみたい（「自分の父親」「自分の母親」「その他」の回答結果は巻末の基礎集計表47を参照）。まず、「一緒にいて楽しい人」は「子ども」と答えた父親が57.5%、次いで「妻」が22.9%、「友人」が13.2%で、子どもと一緒にいるのが楽しいと感じている父親が多いことが示されている。「自分の考えや意見を率直に交わし合える人」は「妻」が57.0%でもっとも高く、次いで「友人」19.5%、「仕事の仲間」9.5%の順で、友人も大事な存在であることがうかがえる。「つらいとき、こまったとき、相談する人」では、「妻」「友人」に続いて多かったのが「誰もいない」で、12.8%だった。

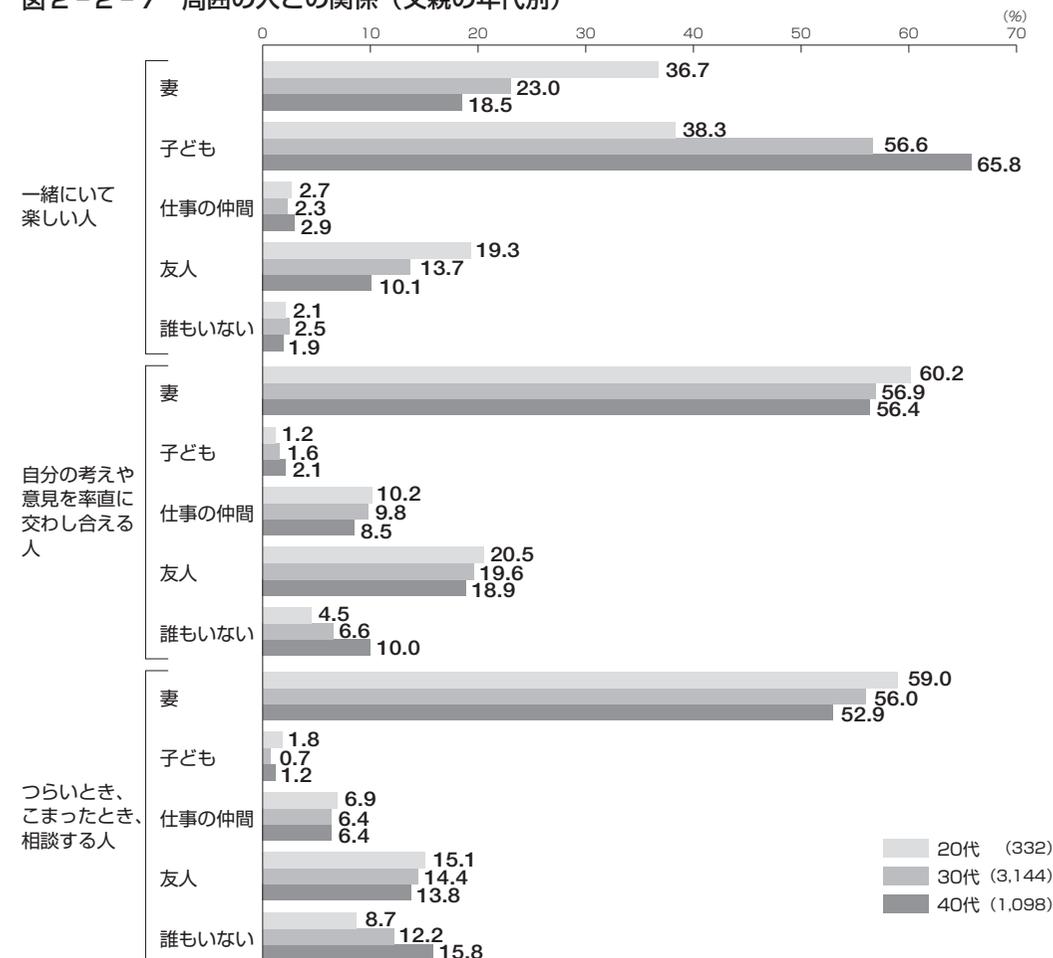
続いて、上記3項目について父親の年代別に比較した結果が、図2-2-7である。まず、年代があがるにつれて、「一緒にいて楽しい人」は「妻」から「子ども」へと変化する様子が見えてくる。これには子どもの成長なども関係しているだろう。一方、「自分の考えや意見を率直に交わし合える人」と「つらいとき、こまったとき、相談する人」では、「妻」の比率はどの年代でも5割を超えているものの、年代があがるにつれ、その比率は減少傾向を示し、逆に「誰もいない」の比率が増加している。この2項目は、子どもの成長などの影響を大きく受けるとは考えにくく、とくに40代の父親において、率直に意見を交わし合ったり、相談したりできる関係が希薄になりつつあることが示される結果となった。

図2-2-6 周囲の人との関係



注) 各項目について、8項目の選択肢の中から1つ選択。「自分の父親」「自分の母親」「その他」を除く5項目を表示。

図2-2-7 周囲の人との関係（父親の年代別）



注1) 各項目について、8項目の選択肢の中から1つ選択。「自分の父親」「自分の母親」「その他」を除く5項目を表示。
注2) () 内はサンプル数。

◆子どもをもう1人「持ちたい」と答えた父親は約5割で、とくに一人っ子の場合は7割を超えている◆

図2-2-8は、「もう1人子どもを持ちたいか」についてたずねた結果である。これをみると、「持ちたい」と答えた父親は全体の48.6%、「持ちたくない」は23.2%、「どちらともいえない」は28.2%であった。これを子どもが1人の世帯の父親に限ってみると(図2-2-9)、「持ちたい」が71.2%、「持ちたくない」は7.4%、「どちらともいえない」は21.5%となっており、2人以上の子どもを持ちたいと思う父親が7割を超えていることがわかる。一方、すでに2人の子どもを持つ父親は、「持ちたい」が28.8%、「持ちたくない」は35.6%、「どちらともいえない」は35.6%で、子どもが1人の世帯の父親に比べて大きく減少している。子どもが2人になると3人になるとでは、大きな開きがあることが示される結果となった。

◆「もう1人子どもを持ちたいか」には、経済的なゆとり感もかかわっている◆

「もう1人子どもを持ちたいか」について経済的な状況との関係を比較したのが図2-2-10である。これをみると、もう1人子どもを持つことに対して「どちらともいえない」と答えている父親の比率は、経済的なゆとり感による差はあまりみられない。一方、経済的に「ゆとりがある」と答えている父親の57.4%がもう1人子どもを「持ちたい」と思っているのに対して、「ゆとりがない」と答えた父親では45.2%と減少している。また、経済的に「ゆとりがない」父親の28.6%がもう1人子どもを「持ちたくない」と答えている(「ゆとりがある」では13.9%)。

◆2人以上の子どもがいる世帯では、とくに経済的な状況が関係する◆

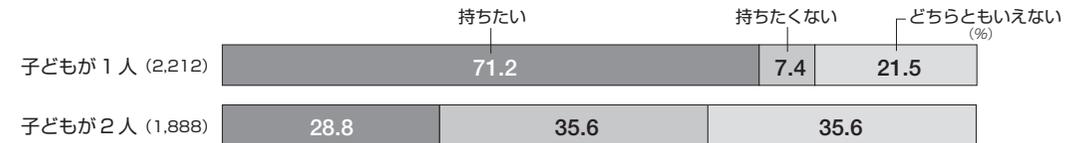
さらに子どもの数によって違いがあるかを検討したところ、子どもが1人の世帯では、経済的な状況による差はあまりみられず、70%前後の父親がもう1人「持ちたい」と考えており、「持ちたくない」はいずれの群においても10%未満であった(図2-2-11)。

それに対して、図2-2-12に示されるように、2人以上の子どもがいる世帯では、経済的なゆとり感による差が示されている。「ゆとりがある」群では36.7%の父親がもう1人子どもを「持ちたい」と思っているのに対して、「ゆとりがない」と答えた父親では27.9%で、逆に「持ちたくない」と答えている比率が42.7%となっている(「ゆとりがある」では22.4%)。子どもを何人持ちたいかについては、さまざまな状況や要因が関係すると考えられるが、経済的なゆとり感もかかわっており、とくに子どもが2人以上いる場合は、その影響は相対的に大きくなる可能性がある。

図2-2-8 もう1人子どもを持ちたいか

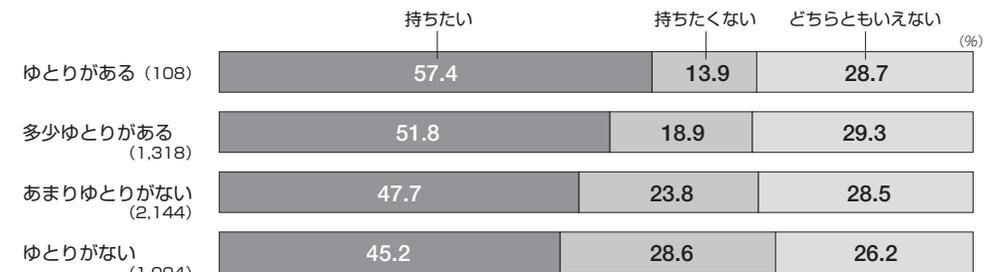


図2-2-9 もう1人子どもを持ちたいか(子どもの数別)



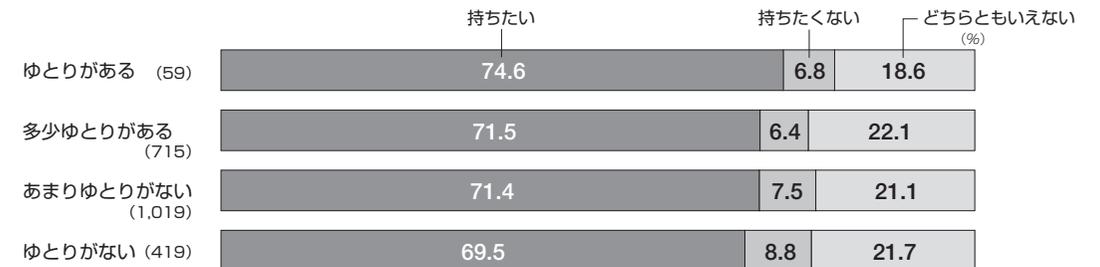
注) () 内はサンプル数。

図2-2-10 もう1人子どもを持ちたいか(経済的なゆとり感別)



注) () 内はサンプル数。

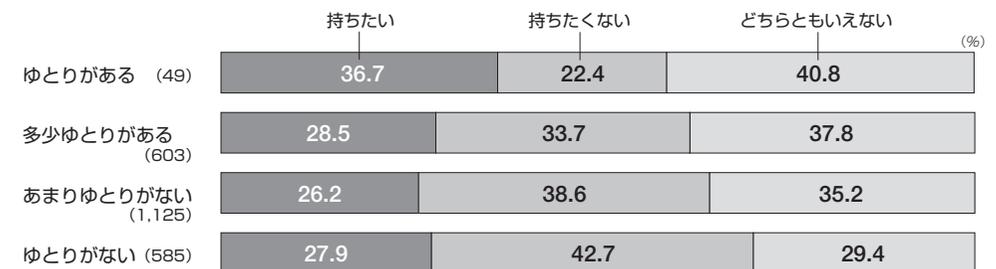
図2-2-11 もう1人子どもを持ちたいか(子どもが1人・経済的なゆとり感別)



注1) 対象の子どもの兄弟(姉妹)構成が1人と回答した人のみ。

注2) () 内はサンプル数。

図2-2-12 もう1人子どもを持ちたいか(子どもが2人以上・経済的なゆとり感別)



注1) 対象の子どもの兄弟(姉妹)構成が2人以上と回答した人のみ。

注2) () 内はサンプル数。

第3節

祖父母とのかかわり

◆もっとも頼りになるのは、妻の母親、そして自身の母親がそれに続く◆

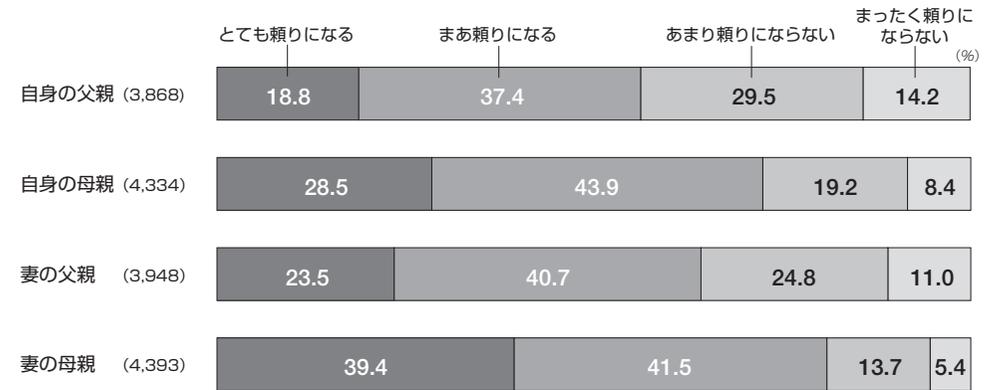
図2-3-1は、子育てをするうえで、子どもの祖父母がどのくらい頼りになるかをたずねた結果である。これをみると、もっとも頼りにされているのが「妻の母親」で、39.4%の父親が「とても頼りになる」と答えており、「まあ頼りになる」と合計すると80.9%という高い数値を示している。自身の母親に対しても72.4%の父親が肯定的に回答しており（「とても頼りになる」＋「まあ頼りになる」）、子育てでは、祖母の存在はやはり頼りになっていることがうかがえる。

一方、祖父に対しては少し意見が分かれるようである。妻の父親に対しては、64.2%が「頼りになる」（うち、「とても頼りになる」は23.5%）と肯定的な見方をしていて一方で、自身の父親への評価は少し厳しいものとなり、肯定的な見方は56.2%で（うち、「とても頼りになる」は18.8%）、「まったく頼りにならない」と感じている父親も14.2%いる。

◆40代の父親は、20代、30代に比べて、親を頼りにすることは少ないようだ。とくに自身の父親が頼りになると答えているのは約半数である◆

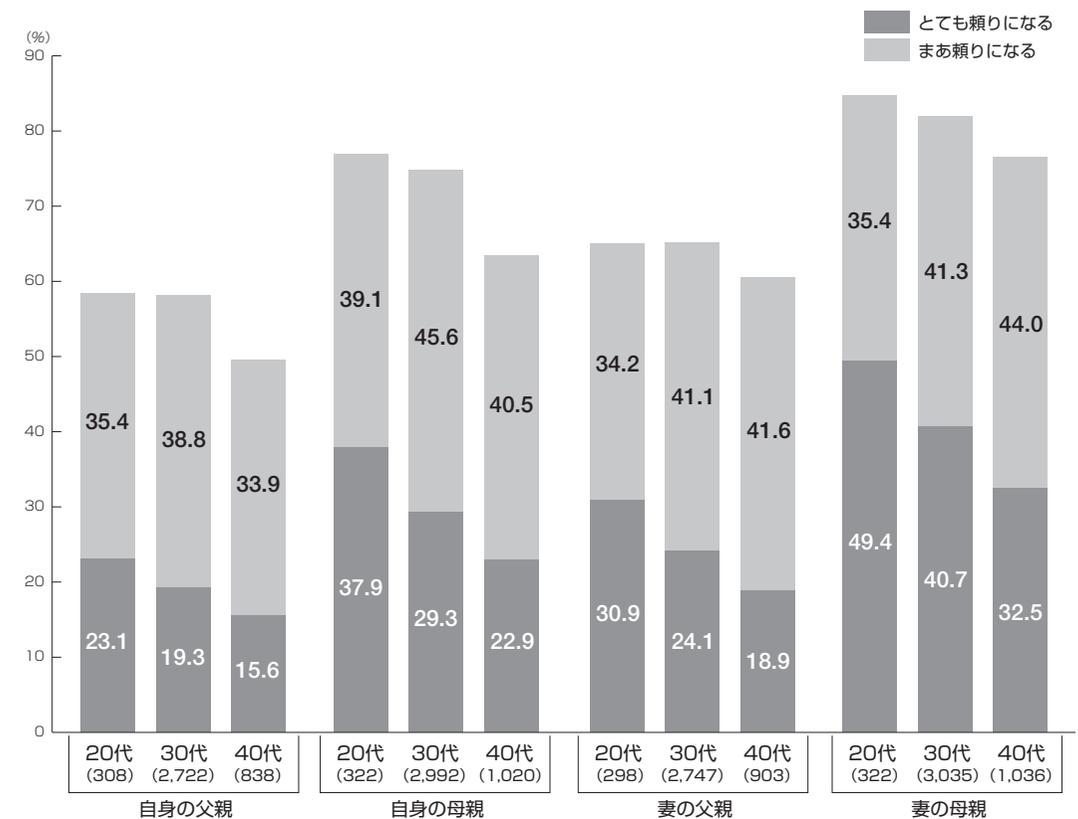
頼りになる子どもの祖父母について父親の年代別に比較した結果が、図2-3-2である。これをみると、妻の母親への評価がもっとも高く、次いで自身の母親、妻の父親、自身の父親という順序は年代にかかわらず同じであるが、40代の父親は20代、30代の父親に比べて、祖父母世代を頼りにする比率は低いようだ。とくに自身の父母に対しては、その傾向がみられ、たとえば自身の母親について20代の父親の77.0%、30代の父親の74.9%が「頼りになる」（「とても頼りになる」＋「まあ頼りになる」）と答えているのに対して、40代の父親では63.4%となっている。自身の父親に対してはさらに低く、20代と30代の父親の約58%が肯定的な見方をしていて、40代では49.5%となっている。祖父母の加齢や子どもの成長など、さまざまな要因が関係していることが想像できる結果となっている。

図2-3-1 祖父母は子育てで頼りになるか



注1) 自身・妻の親（父親・母親）がそれぞれ「いない」回答者は、集計母数から除外。
注2) ()内はサンプル数。

図2-3-2 祖父母は頼りになるか（父親の年代別）



注1) 自身・妻の親（父親・母親）がそれぞれ「いない」回答者は、集計母数から除外。
注2) ()内はサンプル数。

◆子どもの託児や子育ての相談で頼りにしているのは、妻の母親、自身の母親。
経済的な支援は自身の父親◆

図2-3-3は、子どもの祖父母世代それぞれに対して、子育てや家事に関してどんな支援を受けているか10項目についてたずねた結果である（各項目について複数回答）。まず、「子どもを預かってもらう」のは妻の母親が35.9%と最も多く、次いで妻の父親25.3%、自身の母親22.8%、自身の父親17.3%の順になっている。同じく、「子どものみ泊まりにいくのを引き受けてもらう」も、比率は高くないものの、どちらかといえば妻の両親を頼っている様子がうかがえる（妻の母親14.2%、妻の父親11.9%、自身の母親10.0%、自身の父親8.7%）。一方、「子育ての相談にのってもらう」は、妻の母親25.2%、自身の母親20.9%と女親を頼りにしている様子が示されている。また、「家事（食事作りや掃除洗濯など）を手伝ってもらう」「子どもが病気のときに預かってもらう」はいずれも2割以下ではあるが、やはり双方の母親に、より助けてもらっていることがわかる。

それに対して、「経済的に支援してもらう」は、自身の父親26.0%、自身の母親23.5%、妻の父親19.8%、妻の母親18.4%の順であった。つまり、経済的な支援は父親自身の実家を頼りにしており、唯一、自身の父親がもっとも高い比率を示した項目であった。

また、支援してもらうことが「特にない」のは、自身の父親がもっとも高く（45.7%）、妻の母親がもっとも低かった（28.0%）。

◆若い世代の父親のほうが、祖父母に子育ての相談をし、
経済的な支援を受けている◆

祖父母世代からの具体的な支援内容について、父親の年代による特徴はあるのだろうか。ここでは、とくに助けてもらっている特徴的な項目を中心に、年代別の比較を行ってみる（図2-3-4）。まず、「子育ての相談にのってもらう」は双方の母親を頼りにしている比率が高い項目だが、妻の母親に対しては20代が33.2%、30代が25.9%、40代が20.8%、自身の母親に対しては20代が27.3%、30代が21.8%、40代が16.0%となっており、若い年代の父親ほど、双方の母親に子育ての相談をしている様子が示された。

「経済的に支援してもらう」は、自身の父親からの支援がもっとも高かった項目だが、年代別に比較すると20代で29.5%、30代で26.3%、40代で23.6%となっており、若い世代の父親のほうが、自身の父親から経済的な支援を受けている比率がわずかに高い様子がうかがえる。また、いずれの親に対しても「特にない」と答えた比率は40代がもっとも高く、全体に若い年代の父親ほど、祖父母世代の支援を受けていることが示されている。

図2-3-3 祖父母からの支援

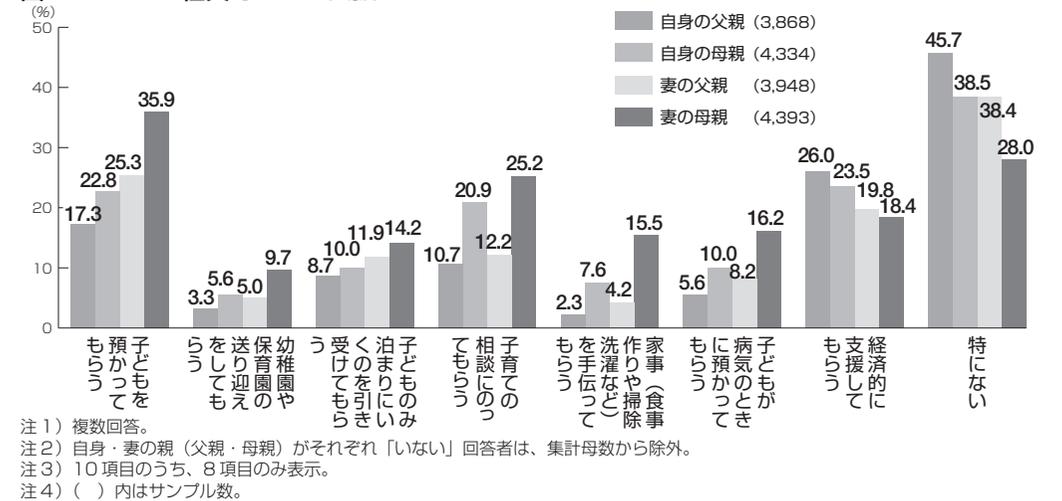
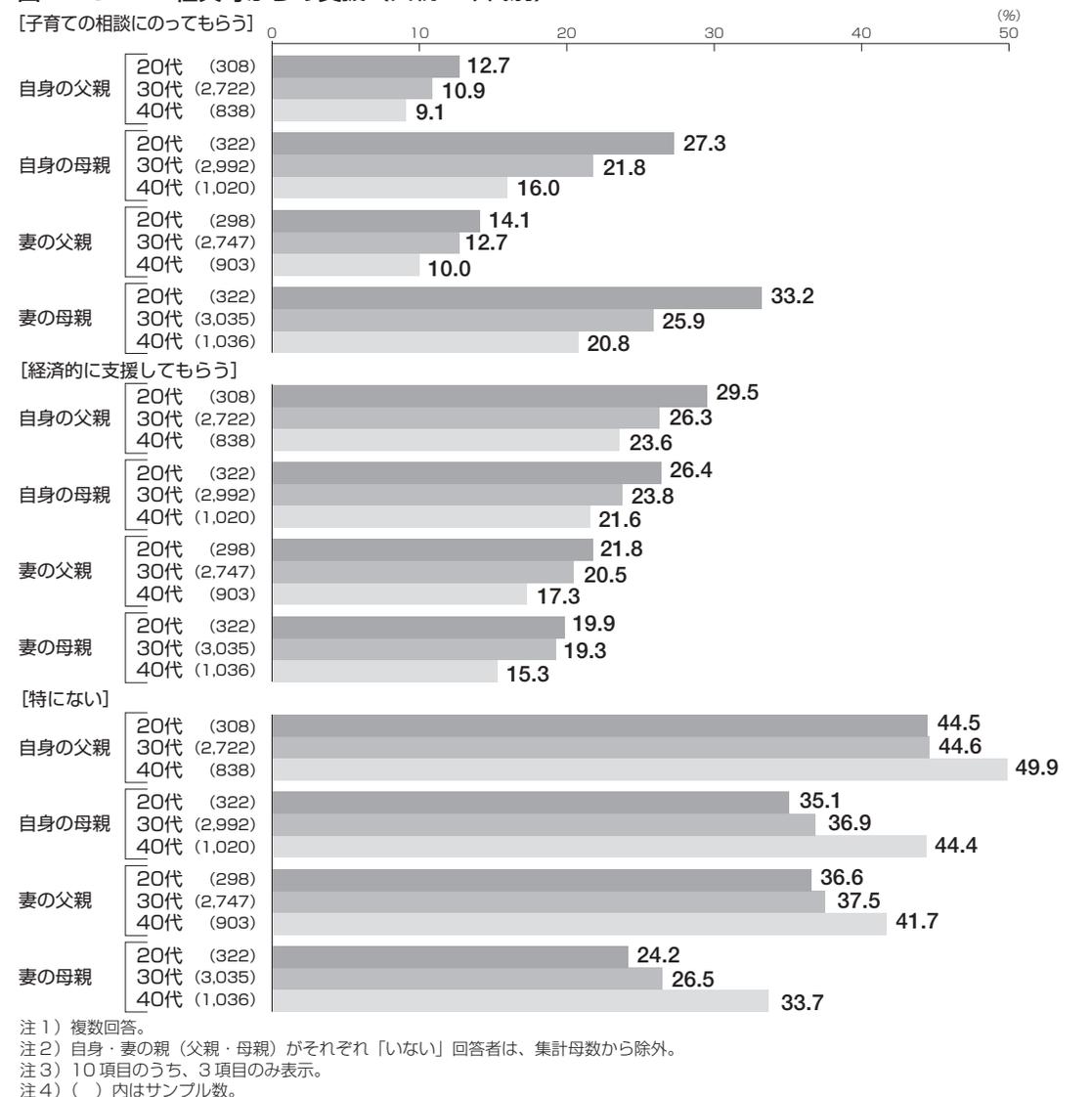


図2-3-4 祖父母からの支援（父親の年代別）



◆妻が就業している共働き世帯では、仕事と子育ての両立に必要な直接的な支援をより受けている◆

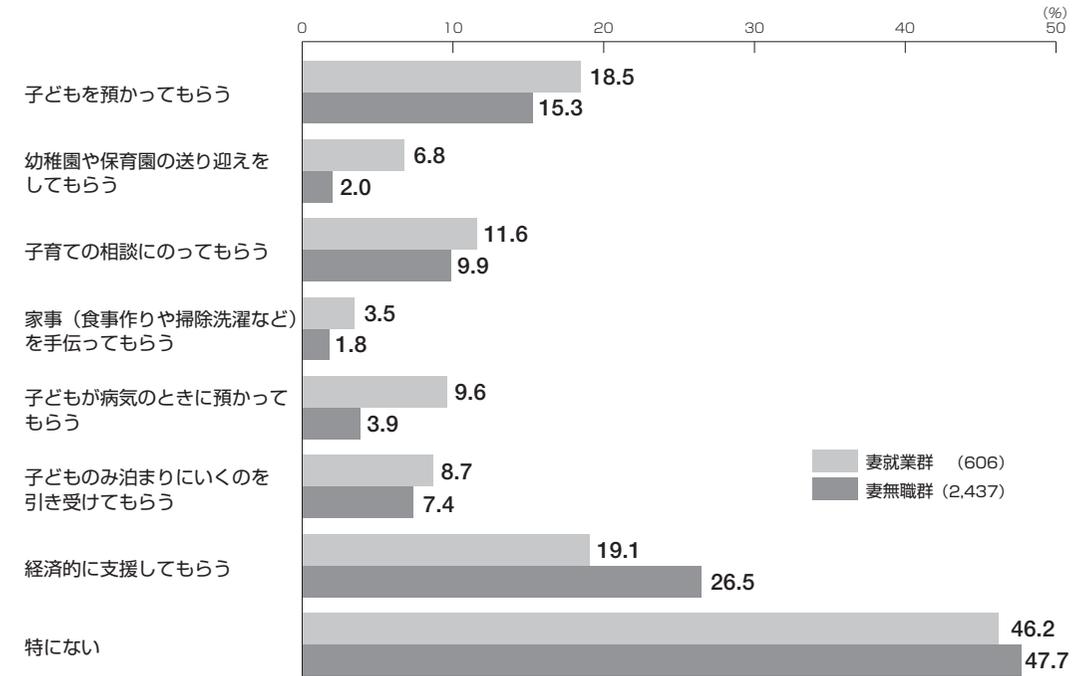
妻の就業状況によって、祖父母世代からの支援に違いはあるのだろうか。ここでは、就業状況の条件をできるだけそろえるため、夫が就労している世帯で、妻が「正社員」の群（以下、妻就業群）と、妻が「無職」の群（以下、妻無職群）で比較を行った（図2-3-5～8）。その結果、「（手助けは）特にない」「子育ての相談にのってもらう」「子どものみ泊まりにいくのを引き受けてもらう」では妻の就業状況による差はみられなかった。それに対して、「子どもが病気のとくに預かってもらう」「幼稚園や保育園の送り迎えをしてもらう」などの項目において違いが示された。

まず、「子どもが病気のとくに預かってもらう」について、妻就業群は祖父母に支援を依頼することが多く、妻の両親に加え（妻の母親：妻就業群27.2%＞妻無職群12.2%、妻の父親：妻就業群15.4%＞妻無職群6.1%）、自身の実家の両親も頼りにしていることが示された（自身の母親：妻就業群16.0%＞妻無職群7.0%、自身の父親：妻就業群9.6%＞妻無職群3.9%）。また、「幼稚園や保育園の送り迎えをしてもらう」でも、比率はそれほど高くないものの、同様の傾向が示されている（妻の母親：妻就業群19.7%＞妻無職群5.8%、妻の父親：妻就業群11.8%＞妻無職群2.8%、自身の母親：妻就業群9.4%＞妻無職群4.0%、自身の父親：妻就業群6.8%＞妻無職群2.0%）。また、「家事（食事作りや掃除洗濯など）を手伝ってもらう」も、妻就業群では、その比率は妻無職群より高い傾向にあり、仕事と子育てを両立させるための物理的な支援を受けている様子がうかがえる。

このように、妻が就業している世帯では、祖父母に物理的な支援を頼むことが多い一方で、「経済的に支援してもらう」については、妻無職群のほうが、祖父母に支援してもらう機会が多いようだ。とくに自身の両親からの支援の比率が高いという、全体での傾向と同じ結果が示されている（自身の父親：妻無職群26.5%＞妻就業群19.1%、自身の母親：妻無職群23.9%＞妻就業群16.5%、妻の父親：妻無職群20.9%＞妻就業群12.9%、妻の母親：妻無職群19.1%＞妻就業群12.7%）。

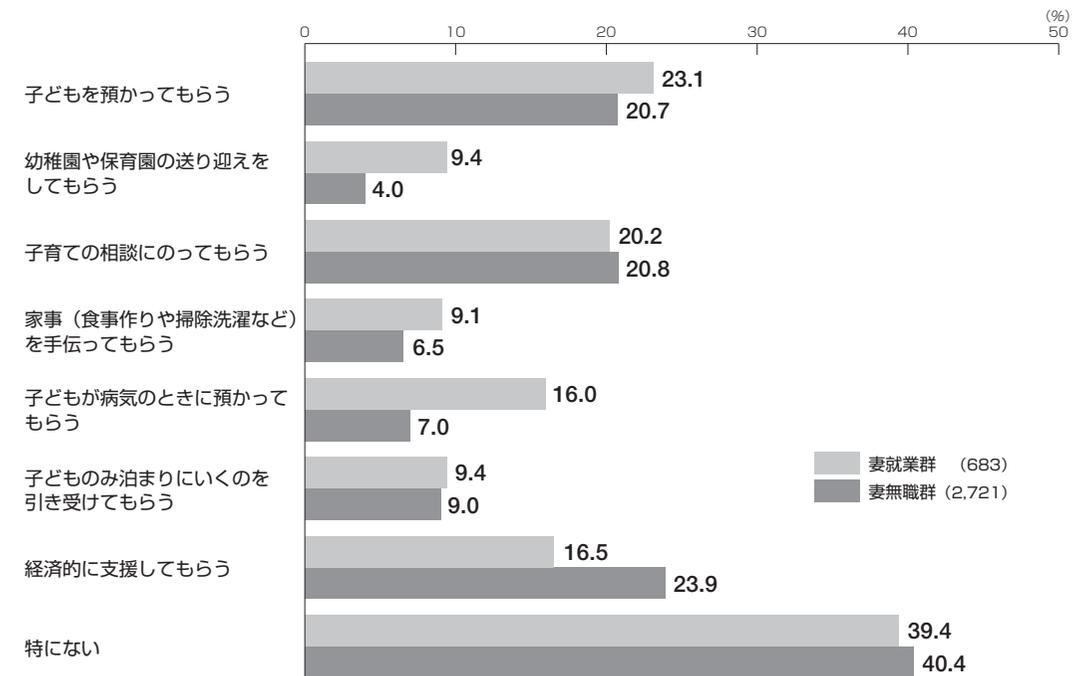
祖父母からの支援は同居の有無や住まいの距離をはじめ、祖父母の年齢や子どもの年齢など、多様な要因がかかわると考えられるが、妻の就業状況という点からの比較においては、上記のような特徴が示された。なお、祖父母に助けてもらうことは「特にない」、つまり祖父母世代の力を借りずに子育てをしている世帯も両群ともに存在していることも改めて指摘しておきたい（自身の父親：妻無職群47.7%⇔妻就業群46.2%、自身の母親：妻無職群40.4%⇔妻就業群39.4%、妻の父親：妻無職群38.7%⇔妻就業群38.8%、妻の母親：妻無職群29.3%⇔妻就業群28.1%）。

図2-3-5 自身の父親からの支援（妻の就業状況別）



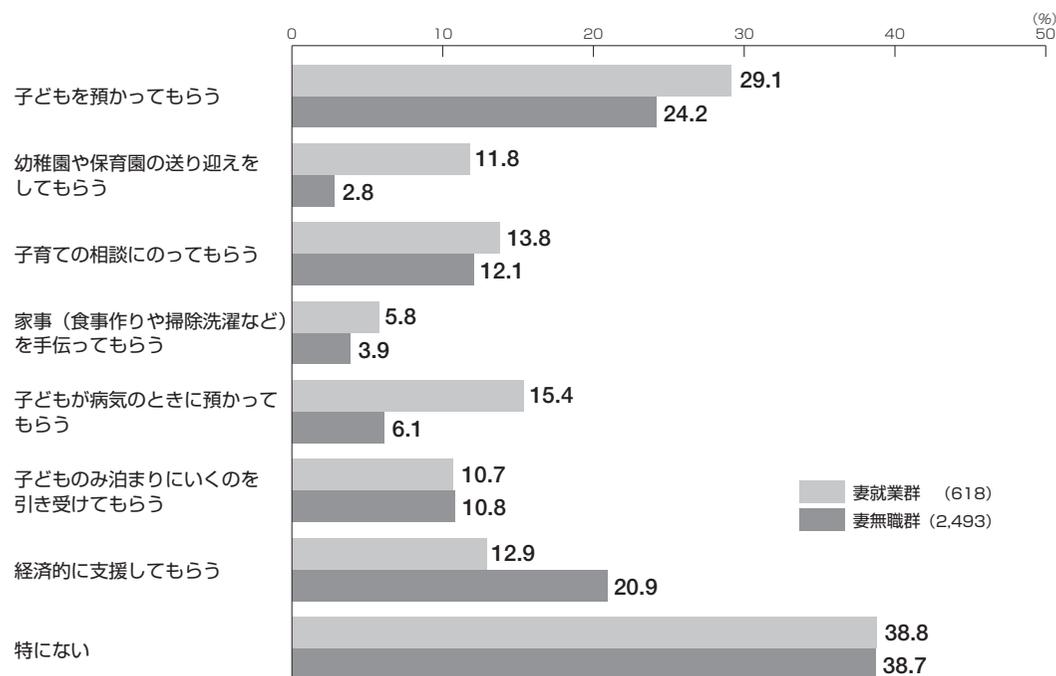
注1) 夫が「無職」「その他」を除いて分析。
 注2) 妻就業群は、妻が正社員。妻無職群は、妻が無職。
 注3) 自身の父親が「いない」回答者は、集計母数から除外。
 注4) ()内はサンプル数。

図2-3-6 自身の母親からの支援（妻の就業状況別）



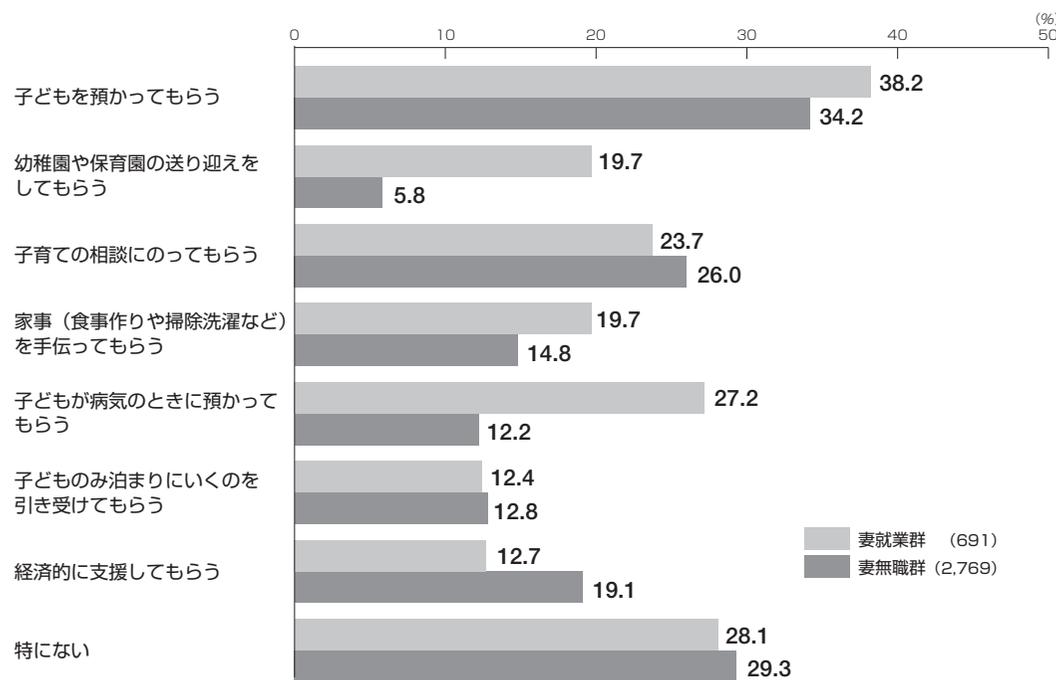
注1) 夫が「無職」「その他」を除いて分析。
 注2) 妻就業群は、妻が正社員。妻無職群は、妻が無職。
 注3) 自身の母親が「いない」回答者は、集計母数から除外。
 注4) ()内はサンプル数。

図2-3-7 妻の父親からの支援（妻の就業状況別）



注1) 夫が「無職」「その他」を除いて分析。
 注2) 妻就業群は、妻が正社員。妻無職群は、妻が無職。
 注3) 妻の父親が「いない」回答者は、集計母数から除外。
 注4) () 内はサンプル数。

図2-3-8 妻の母親からの支援（妻の就業状況別）



注1) 夫が「無職」「その他」を除いて分析。
 注2) 妻就業群は、妻が正社員。妻無職群は、妻が無職。
 注3) 妻の母親が「いない」回答者は、集計母数から除外。
 注4) () 内はサンプル数。